



~13
4391
1



自序
戊辰春墨水觀花之次過好友人柳葦綾瀨別業飲漱石水園對岸桃花
爛燦如錦與折葦分韻詩此最濃也偶見元遺山集本中有劇州一本
大刺予曰主人何若不同流蕙葭与玉林四一柴柳葦採劇本示予曰此書劇詞場中
為翻楚有竹田出雲既在若花衣篇蓋駕國之既載就烏攬良辨話作之清人蔣士
銓於鐵丐傳與編雪中人傳奇相類也平糲之佳話慰十載之遐思請試讀之於
劇字倚掬于用解眼護之間有妙句不免終全部天色竟晚步月歸家此
夕几坐意有既觸構局亦編逐化一動夜連曙人事雜運小暇書之越二十日稿
脫題同就寫談傳奇桃花流水以似柳葦觀女堂得刻之遂與去雲之徒同其流矣
刻成序之文化戊辰歲立秋月也 山東 晏京山 撰



自序
戊辰春墨水觀花之次過好友人柳葦綾瀨別業飲漱石水園對岸桃花
爛燦如錦與折葦分韻詩此最濃也偶見元遺山集本中有劇州一本
大刺予曰主人何若不同流蕙葭与玉林四一柴柳葦採劇本示予曰此書劇詞場中
為翻楚有竹田出雲既在若花衣篇蓋駕國之既載就烏攬良辨話作之清人蔣士
銓於鐵丐傳與編雪中人傳奇相類也平糲之佳話慰十載之遐思請試讀之於
劇字倚掬于用解眼護之間有妙句不免終全部天色竟晚步月歸家此
夕几坐意有既觸構局亦編逐化一動夜連曙人事雜運小暇書之越二十日稿
脫題同就寫談傳奇桃花流水以似柳葦觀女堂得刻之遂與去雲之徒同其流矣
刻成序之文化戊辰歲立秋月也 山東 晏京山 撰



畫舫

為京山詞宗



舞筆

歌

舞

姚小影





讀桃花流水三首

巾幘網常事可風筆花淚染桃花紅偶然讀

到詠訛處天籟隨之入耳中

詞苑曾推若士湯南安夢境太荒唐不傳梅

柳傳桃李壓倒風流玉茗堂

意盡情絲細品量桃花流水有餘香頭廳間

袖三長手却與春光作主張

戊辰春

空谷樵者草



喜塘真藪過子

空谷主人之山館

偶見溪桃花露水

化予亦戲作此圖也

與京山文

醉錄





此書既稿後辱 兩公子之羨絕藏篋際
 曾步魚狗卷首以壯 大方所鑒
 文化戊辰三月 京山陳人



此家茅京山新此
 稿心苦苦花初競奇甚愁
 城台必為遲閑因甚而生暇

日度空林
 倚竹時展曉
 偏解忘義
 志沈吟後老
 蘇
 曲少熟可
 嬰兒古几
 孫子
 異家如童
 話也
 醒高京傳



風の物に吹まろふさきさき
 あらそとすくくはゆららる
 雲の中へ入るはかきくも
 ぼろ川のちりきりあつた
 うらみの波ふるちるせ
 まつち山のねのきりそのね
 まどをさきさきせりわづら
 さきさき
 さきさき
 ららららら
 らららら
 ひらひら
 きらきら
 それもあつたの
 よめさきさき



☆☆☆ 右小著を師宣の園に淡彩の絹帳ろろ安書或刻まる
 観竹堂本小購得なるとそ小贈まり畚中小題一たる
 ☆☆☆ 文の三浦屋の小紫と小阿曾比の作れる萱子と小小歌あり
 ☆☆☆ 洞房花園小見の家兄京傳の家の蔵小紫の短入あり
 ☆☆☆ その運業、安書小お似たり師宣の小紫と時を同じせ
 ☆☆☆ のちこれ此魁能 小紫の書さきさきおむる
 ☆☆☆ 藻の花や繪をかきつけてさきさ水と昔子の横せーもその
 ☆☆☆ 阿曾比より一おのれ安書を甚述せる縁より得
 ☆☆☆ 軸うれを鑑書一とらふおつ好事家の一観小
 ☆☆☆ 具さつめこ

酔子後



山桜花の
下風吹ハ
本のかと
ここの
雲の
あふく



秋幸の内君
花の方
子氏王丸
志賀里
花見の圓



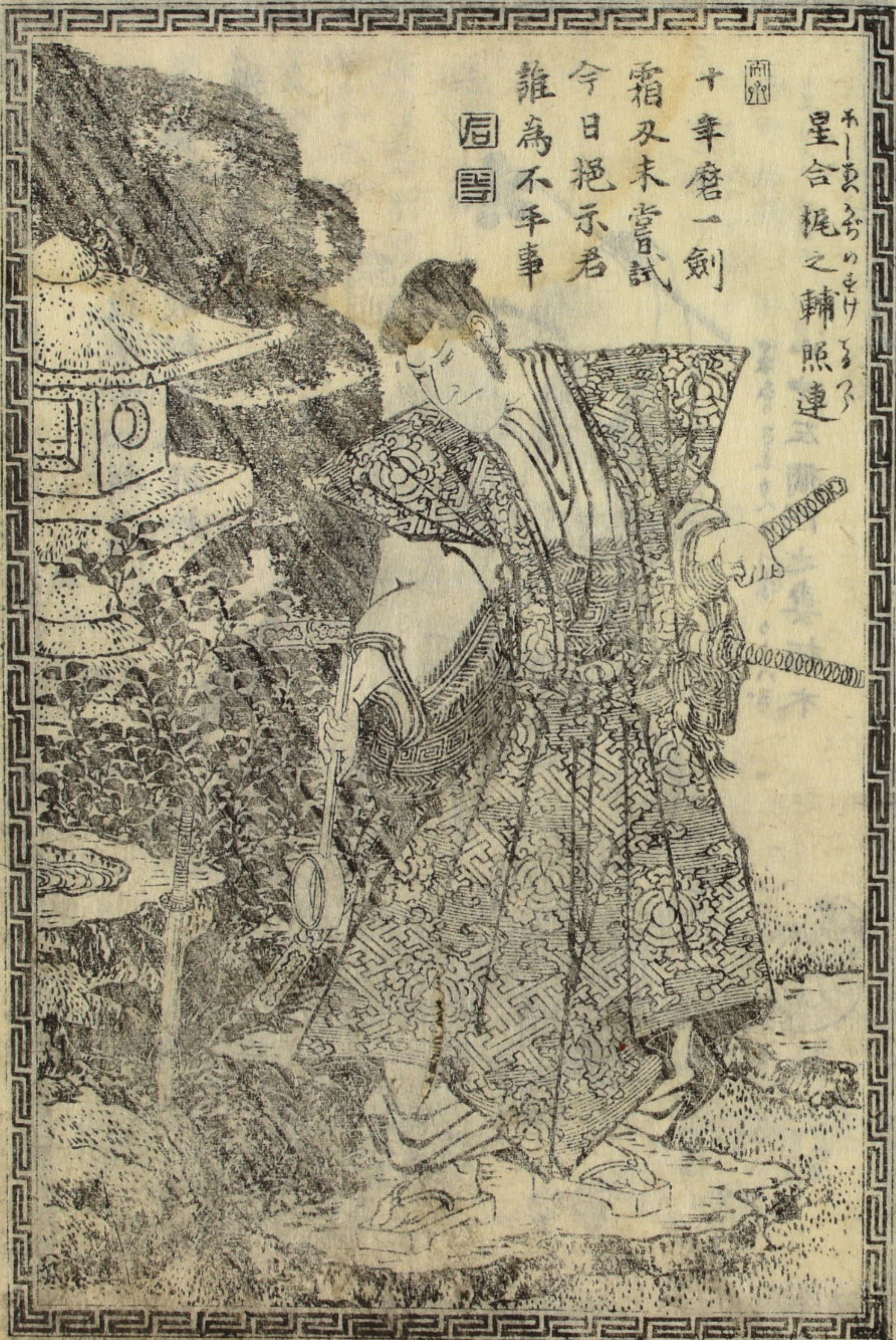
雪丸星眸並所
 稀摩天專待振
 毛衣 圓 兩

山中左工門一子招
 三之助



桃文稱辟惡
 桑表質初生
 圓 四

○ 山中左工門正當田



十年磨一劍
 霜刃未嘗試
 今日挹示君
 誰為不平事

星合梶之輔照連



旧曲聽來於有
 恨故園坂去却
 無 園 回

地獄坂の女非人
 鬼一芝

西
生別死愁一夜来芳心明意
衣難回霜凤破却滿樹泥玠
深影面置苔

醉之新主人題



山中左衛門之妻栢木

娘小姫



山中左衛門家録
春瀬由良之進



忠骨孝肝鐵石
心家無四壁不
寶器飛動鴻鶴
志衰風裏劍光
斬寇人知

醉之子題



園新和楚
花株歩
帶山詞
唱園四



由良之進家
景作

同金
象皆能鑿
一箇人心不可明



原四

頑婦
真弓
之方

眉黛奪將萱草
色紅裙妬殺
花

山中三之助

再出

五月雨の小督




山樵
枝朵六

西
唯愛風流高
格調
共憐時並儉
梳妝

深雪



僕自幼嗜鏤印章凡銀銅牙角玉石隨
 村奏刀嘗執此技遊文場已久矣今欲
 售此技以充楮墨之費然則不復屬閑
 巧夫茲定工價一用款于卷尾願諸君
 賜顧者嗣索拙作榮幸之至
 統云垂鑒
 文化戊辰夏五 山東京山  欽向

驚談傳奇桃花流水卷之一

江戸 山東京山 編次

第一齣 壽筵

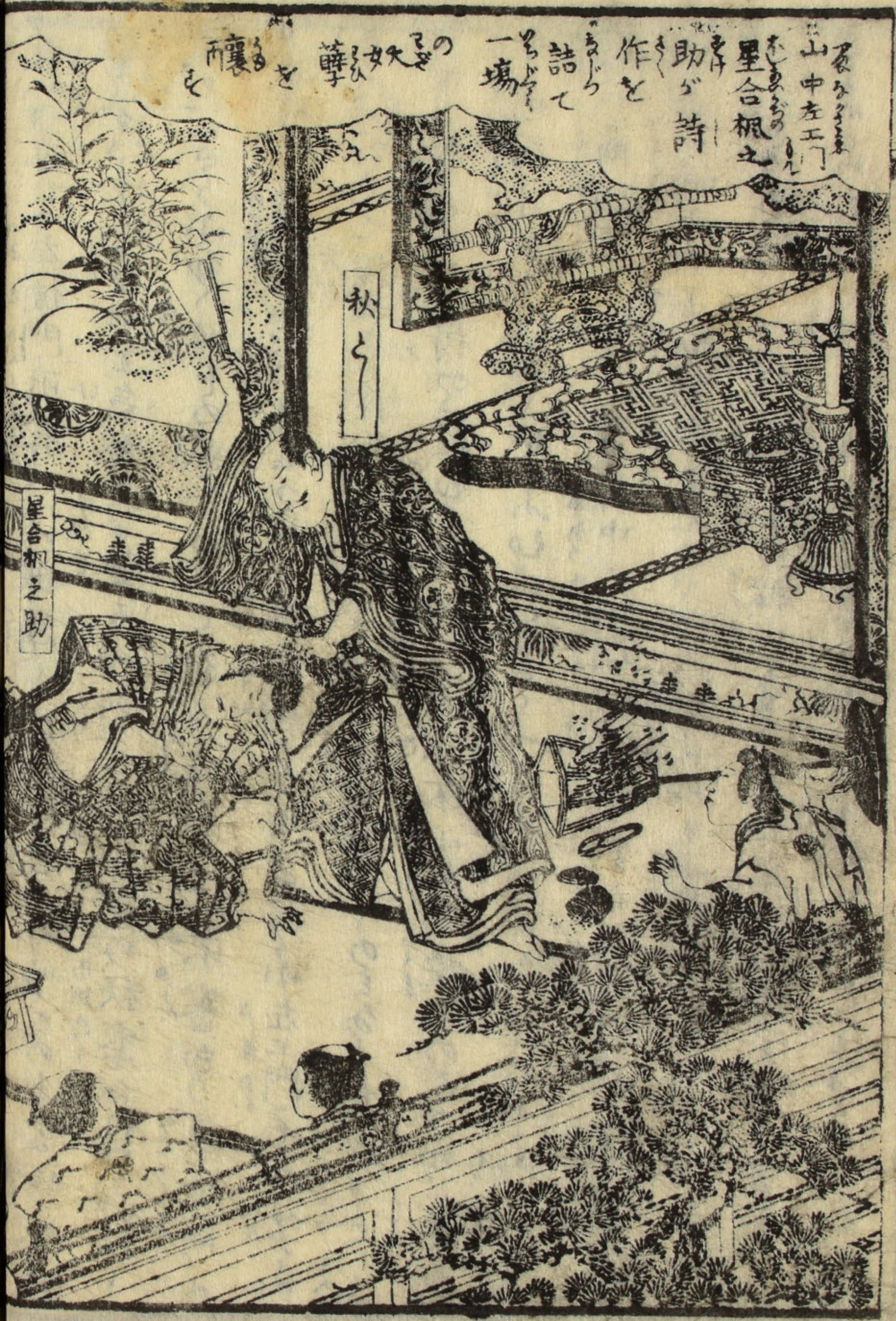
今い昔應永の年間近国松江の庄小松江判官藤原秋幸といふ人
 のて多り強氣勇猛小去て武略小長ト南朝は忠勤を奉り一功を
 よりて去る明德三年南北兩朝和睦の刺江州松江又加恩乃野領を
 賜しより後彼所又居を移し餘多の家臣を扶助かして家臣榮る
 秋幸の妻と花の方といふ前より南朝の右宮に仕へたる女房小と哥字の
 さうあり然竹のあふへ絵を花むをひの技小さといと妙ありなるは艶姿
 秀泉心ざる貞介ありるあど夫婦のかつとわをかくて睦深くといひぬ
 嫡子氏王丸といふ先妻の子小くと花の方小い継し次ありなるは

花のうしろ小瀧るてりあり我實の子のごとくかひひかへ愛養てこよ
 氏王九十一歳より時心永七年の春秋季四十の初度よわさ
 され誕生の日おろろかび家臣寺をのめ初老の年賀を祝ひ喜び乃
 酒宴と催とべとひめて其心くるへありる小花の方のをうひこして家臣
 寺小祝ひの歌をよめせ賀筵の日披講あさひびこて寄松祝とひ
 兼題をよめられうらるる又日ごろ哥道よ志あるのの哥合するありて
 よろこぶとくごもその技め疎さりのごめのかのれが俗るとをがらひなり
 秋季の兵革の間は成長て武事をこの雅事おの心をりつひざれば
 祝の哥とあつむるいこのと興あることわりありざれば北の方のおがり立
 ろんべそのまふうちおき多ひぬ爰よまき秋季が普代恩顧の長臣よ
 中左衛門三當といふ者ありり性質廉直よして禮節を重し子通
 巾と脱し伯鸞龜を滅するの風旨とあひて最老実ある武士ありる
 武藝のいとぬ且て和哥とての京ある某の郷の弟子とありてそのもちよ
 かこれば秋季の四十と賀する祝哥と奉らとぶき役小どろろをれり
 これ則彼が身と同一家と失ふべき一端も后ふぞおのいふれけるわくく
 かどめく秋季が吉誕の日おろろされば秋季廣院よ家臣寺とありめ
 嫡子式王九とあさへて上座よ坐とまうけられ山の中左衛門ひとまの
 障子とひるも輝光ける文臺のうよあわたの懐紙をつもせて捧つを
 秋季の左の方おひにさがりて席をまうく家臣の面く而側よ袖と連
 居おびり花の方の薫たれる裏よあふこの侍女とあさへ侍従黒方の
 たひあやわんいと妙の薫とてのめ色て哥の披講をまうとひんて
 時よ夜ののめりるれば銀燭の光金屏よ輝て画る鶴千歳のまうこと

花のうしろ小瀧るてりあり我實の子のごとくかひひかへ愛養てこよ
 氏王九十一歳より時心永七年の春秋季四十の初度よわさ
 され誕生の日おろろかび家臣寺をのめ初老の年賀を祝ひ喜び乃
 酒宴と催とべとひめて其心くるへありる小花の方のをうひこして家臣
 寺小祝ひの歌をよめせ賀筵の日披講あさひびこて寄松祝とひ
 兼題をよめられうらるる又日ごろ哥道よ志あるのの哥合するありて
 よろこぶとくごもその技め疎さりのごめのかのれが俗るとをがらひなり
 秋季の兵革の間は成長て武事をこの雅事おの心をりつひざれば
 祝の哥とあつむるいこのと興あることわりありざれば北の方のおがり立
 ろんべそのまふうちおき多ひぬ爰よまき秋季が普代恩顧の長臣よ
 中左衛門三當といふ者ありり性質廉直よして禮節を重し子通
 巾と脱し伯鸞龜を滅するの風旨とあひて最老実ある武士ありる
 武藝のいとぬ且て和哥とての京ある某の郷の弟子とありてそのもちよ
 かこれば秋季の四十と賀する祝哥と奉らとぶき役小どろろをれり
 これ則彼が身と同一家と失ふべき一端も后ふぞおのいふれけるわくく
 かどめく秋季が吉誕の日おろろされば秋季廣院よ家臣寺とありめ
 嫡子式王九とあさへて上座よ坐とまうけられ山の中左衛門ひとまの
 障子とひるも輝光ける文臺のうよあわたの懐紙をつもせて捧つを
 秋季の左の方おひにさがりて席をまうく家臣の面く而側よ袖と連
 居おびり花の方の薫たれる裏よあふこの侍女とあさへ侍従黒方の
 たひあやわんいと妙の薫とてのめ色て哥の披講をまうとひんて
 時よ夜ののめりるれば銀燭の光金屏よ輝て画る鶴千歳のまうこと

うつゝ彩色松万代の緑とあて最も富貴光景あり時山中左衛門
 文臺とさうと出て吟上る哥をもときけあひひ万代を松の尾山のけ
 まげとことぶさあひい任の江よ生と松の枝とよと祝よ子の日とる
 埜邊の小松をうらゝ裁て年の尾あがに齡をいのれが相生のうかの山と
 よまかひて千とせのふびとたのち千秋を賀し万歳を祝ひ三十一文字の負
 おかトそれども詠づる意いかのがさあぐふていれおろろかろりろ披講も
 や半あると左衛門星合棍之助颯連といふのくよある哥の上の句と
 吟トうと懐紙を手小ころあげ思案もかありー膝の下へり
 除て次の哥を吟トろり秋季これを見咎て左衛門と對ひ汝今伴乃
 颯連と名告をあげ上の句を吟上たのふて何ゆ多懐紙を取除
 不審ふるまひありと向とられ左衛門頭をさげ星合棍之助がよめる

すいさての左衛門所存のべ披講をひふの君ふの唯このまよは見え
 たまるべしとひあを氣ある言葉をば烈した氣質の秋季かれけひひ
 気色いさふあ汝その哥よつきて存る旨ありさ不審あり事分明
 かまべしと宣こととの尾よつて棍之助とていふ左衛門をろり多
 哥のうらふて僕がよとたるうごよかろり披講をもろのとありと文臺のし
 むすろあろる心得のたろり相公の取不審を蒙るのろり明筆の
 手前面目あしつてくかりひひとまくべしと眼よ角たてし形勢よ
 席の肅然てよたりろ山中左衛門秋季の對ひ相公の汚不審と
 あろり一通その子細とさこえあぐり棍之助もまひとまか懐紙を
 手小ころあげ ○我君の末の松山をめぐるとを白浪のぶもあろりと
 ことろの不祥の歌めていそれいふとあれば我君の末とはさこるを



山中左エ門
星合根之
助が詩
作を
詩て
一場
の
女
の
華
を
麗
と

山中左エ門

秋

星合根之助

山中左エ門

二

忌(いひ)の詞(ことば)あり又流(なが)れてとどまらざりて砕(くだ)けて消(き)やまた波(なみ)の数(かず)小(こ)君(きみ)が齡(とし)とよそ
 たるも祝(いわ)いの心(こころ)ふい恨(うら)みと評(ひら)ざる身(み)ごとてかろ不祥(ふしやう)のよと哥(うた)とまへ上人(あまのう)の
 相公(さうこう)への惶(おそ)れありさるるあめさうのけひひぬいふ梶(か)之助(のすけ)今(いま)やせし此(こゝ)山中(やまなか)が
 僻(ひそ)かりひめや押(お)身(み)の説(せつ)とうけさぬらんことを次(つぎ)裂(さ)してひひるる小(こ)膽(たん)太(た)さ
 梶(か)之助(のすけ)も返(かへ)答(こた)えさうつまり赤面(せつめん)しをど居(ゐ)たりたる短氣(たんき)の秋(あき)未(み)千(ち)犬(いぬ)小(こ)奴(やつ)り
 連忙(れんぼう)しく座(ざ)を立(た)ちあひ梶(か)之助(のすけ)が髻(こむぎ)相(あ)ひて拵(ひた)やされ暎(えい)連(れん)我(われ)が文事(ぶんじ)よ
 疎(そ)らに輕視(けいし)不祥(ふしやう)の哥(うた)を詠(えい)じて主人(しゅじん)を嘲(あざ)わめを横道(よこみち)者(もの)扇(あふぎ)の骨身(こつみ)と
 よおひふよといひてつらうくつらうと撃(う)ちたまへば髻(こむぎ)告(つ)めんと截(き)りて髪(かみ)を
 乱(みだ)し額(ひま)の疵(きず)は鈍(おろ)洩(し)血(ち)の頬(ほ)のわらうは流(なが)るる見(み)づる形勢(かたち)勢(いきほ)ん
 秋(あき)幸(さい)ひの席(せき)ふり山中(やまなか)左(ひだり)工(く)門(かど)小(こ)むいひ女(め)梶(か)之助(のすけ)を引(ひ)立(た)て早(はや)く目(め)通(と)り
 遠(とほ)ざけよと主人(しゅじん)の命(いのち)にせんまはぬ山中(やまなか)左(ひだり)工(く)門(かど)梶(か)之助(のすけ)小(こ)對(たい)ひか難(がた)せん

評(ひら)ざる者(もの)の役(やく)あればあううあうと恨(うら)みと相公(さうこう)の命(いのち)あれば席(せき)と除(の)き
 たまふといひたる小(こ)梶(か)之助(のすけ)あんの番(ばん)もせど左(ひだり)工(く)門(かど)を眸(まゆ)まけふと恨(うら)みと
 さぬふて次(つぎ)の間(ま)へあうを死(し)なれば家臣(けしん)寺(てら)顔(がほ)を見(み)あせて言葉(ことば)とどを者(もの)も
 初(はつ)大(だい)興(きやう)を醒(さ)めし秋(あき)幸(さい)傾(かたむ)而(して)座(ざ)を立(た)ちあひ翁(おきな)の披講(ひこう)へ重(おも)てのことし
 席(せき)とつて酒酌(さけしやく)べしと彼所(かゝる)来(き)るべしと宣(のたま)ひつ氏王丸(うぢおうまる)と伴(とも)て奥(おく)の處(ところ)へ入(い)り
 るとて次(つぎ)の日花(ひばな)のよ秋(あき)幸(さい)よのよよの昨日(きのう)梶(か)之助(のすけ)の哥(うた)あうといひ人を
 らぐじにその哥(うた)の忌(いひ)はれたのよにわらをかの一首(いっしゆ)大治(たいぢ)三年(さんねん)小(こ)撰(せん)色(いろ)たる
 金葉集(きんえつしゅう)賀(が)の部(ぶ)は載(の)る永成法師(えいせいぼうし)の翁(おきな)に此(こゝ)かと難(がた)し説(せつ)梶(か)之助(のすけ)基(もと)俊(とよ)悦(えき)目(め)録(ろく)なる
 常(とこ)くうまけしたまふぬの男(おとこ)こきうとて此(こゝ)度(たび)哥(うた)とらぬらん人を乃(すなは)ち
 俗(よこしま)たる人(ひと)ふそしうまふことをいとい屏風(びやうぶ)さると粘(ね)たる色紙(いろし)めん
 昏(くら)たる松(まつ)よ寄(よ)る祝(いわ)ひおと認(と)て金葉集(きんえつしゅう)のよともあうをよの意(い)

ろくく曉し得る上の五文字とほくううえて哥詠顔は懐紙をいじ
の席は連しへ最く堪笑為よい山中左衛門八君の同せぬゆゑよかひ
こゝろく席上ふてうの哥を難しへいよも金葉集の哥といふなり其
出所をいひて梶之助よか盗人の悪名とどうせざるへ小町は無名とわらせ
たる黒主の昔がうふ変うう実ふも仁義の雅男ふいづとやとひてす
賞美したまひぬれば秋幸これとまひふもさこととかりつる心より左衛門が
志を感じて當時義家郷の帯せられし短刀の短刀の短刀と摸て
作らせたる短刀を当座の褒美として山中左衛門よとせ梶之助も
かゝこちかぬる

第二勲 失記

近江国志賀里三井の北。西郡。正興寺。新在家の 往古景行天皇と始奉り

天智の帝も都したまひる旧都ふして昔みつる景色ハ山さうらの
香よのこきて世くの撰集ふも此地の春とよぬるへあく京極の御休所ハ
一樹のかけよ一種の物語とのこしひつ名よかへる櫻の名所あり此里の
裏ふも花園とふ所ハつて櫻のかければ弥生のころの貴賤群集しそ
豊饒うき儲り山中左衛門ハ一日かの花園の花えんとと妻乃柏木を
伴ひ今歳十二歳なる娘小君と五歳の男子三之助寺ハ一轎子
よ對合せてのりしり二人の婢女と三人の僕と供よとて花見の
調度飯笥分盆など持せ家ハ譜代の家来春瀬由良之進とて老
実初り者ぬのこして番守とまりせ花園さして立出たり朝のふとハ天
曇つてぬれもの行程も半過るころ晴つてきて長閑よりくれば山中
左衛門妻の柏木よ對の邂逅の踏青よ曇るれ空の心が里ありしよ

快晴して一入の奥をそとへり家よのこる由良之進もうげごとりてまふ
 べーさるふと柏木さこそゆん花園よもやどらういへ小三三之助寺の
 轎子よりおろし歩行いんとて松がげは轎子となて兄弟とあろし三三
 助へ左衛門柏木寺手とさうて歩行はく不どめく花園の里よりこる
 多し時しゆ弥生の半ありなれば八重櫻へ今と禮よ咲つて技めさる
 ことえひとえへ散とらて時さうね雪うとのやまもる躑躅山吹ろかこ
 咲みらて得り説ぶ好景さう左衛門寺彼所此所とえめらりるま
 或へ幕の内は系竹の調を合せ或へ花のりさ今様さうさるあり
 茶坊敷くりの庭をさうて息所をまうけ酒賣りの小宿を區く
 客とまわく常よへ寂寞山里も花のさうふど賑ひる左門へ静る
 櫻のりて用意の幕とせんとちつとさうの通向のりてさる

四五人の士は前路と護らせ女童二人を前よ立せ餘多の侍女と從
 うる上臈貌清らる若公と伴ひの行列さうさうさうさうさうさうさ
 うの左衛門これと見て柏木よひひかへさる來り花の方と氏王君へ
 さうめて此花園は櫻狩しそめさびかありめ我く此所よわの君へ乃
 おそれのれまづとあへ來るべしとて此所を立去り櫻花道見えぬま
 散よりとよみくる志賀の山越のさにいり見り景色殊よとれ
 うる所は幕打まへし櫃をたて飯笥分盒かところいり午飯たう
 杯めがらうと四方の山くと眺望は此所へ花園と去る夏羊里をり
 かして人家稀る僻陋の地なれば深山躑躅岩間を發ら櫻の松
 相よままとて溪川は散りるさ寂寥さ景色を山中左衛門の
 文雅をたのしむ士もる花園の花の豊饒さう此地の蕭條さる



子糸の

山中
左工門
江州
賀の
園の
遊人
櫻を
観る
圖



専一

山中
左工門

山
中
左
工
門

七〇

山景と愛し詩歌と詠めて一人の興とそんより一子三之助の今歳
 五つの愛さう縹色の綸子よ賣尽しと色入は深きうう小袖と
 着し前日秋季山中にありけるかの旭丸といふ短刀のわがどらもつれ
 帯料ありとこれと差手よ深山躑躅の枝とりちて飛翔胡蝶と追
 まんを休いと捷才あり妍の小君後よと色つけ三之助よわの、余の
 らうさうらぬぞ父上の訶詈あふらるといふは猶追まらうと止さうら
 相木ハ幕の内より婢女等よと色つけ三之助は怪我ととまわさかいら
 走り行しと溪川のかたりと行をあと心とつひあをえと人々の乃
 胡蝶と花の枝ふて撃おとしぬ惺惚あまみらる童くすといふは左門
 莞尔かきガ无病ふして老りも健よ生らる我くが一つの福といふ
 射今一の飲べいと杯ととのげ夫婦むつまどく酒酌ふといふは

我子のころろく遊ひ戯ると見て餘念なき樂しと居るとりけの後乃
 山の方よ笛の音かそくに響えらるが漸くよりくありて山と下ると見えぬ
 芻蕘の童二三草と川れらる箆と背負一人の童ハ牛よ跨り
 笛と晚風よ弄しそとさうらぬ左エ門彼等とくぶとら菓子をど
 ころせられ童子とも喜びて牛ハくえよ放らわさ樹の下に並座し
 菓子とりちとらうてうち喰ぬ三之助ハ彼牧童ハ牛よのり来つと見て
 かこれのうの牛よのらめといふは又過ありてあといひとて婢女ともこれを
 ころろれんどもさうらばいせと泣けぬれ左エ門婢女よむくハ農家の
 罵るハ牛ハ柔和ありのあり騎りといふは騎せよといひてうの童よ牛と
 牽つてさせられハ三之助泣ととらとらびりびくとつよよと婢くれを
 抱てのせんととらる時柏木立より稚見よ其短刀ハ婢女どもに持せ

ふとついに三之助頭をうちあがりいやく父上の汚馬はめりあひやうよ
 刀へさして騎べーといひてうけひらさればこれをも彼が心のまよひてのせ
 られは手とうちてよろこび鞞然けりひやふく阿姐見あへ童へ牛よのり
 まづぬといひて牧童は牽と婢女はとくへられてさかへ騎あつて
 最嬉一ささぬありなれば母の柏木夫はひひの牛よのりてさうらうたや寶
 とのく唾あり顔つきの愛らしき幼なれどもあの腰の居やう常吐小児
 とく違ふて見へいといふよ左衛門さにかそとて夫婦私語て我見と羨
 稱するも人の親なる常あり左衛門妻はひひの日ざりゆいふと傾さぬ
 暮ちくぬぬ間よふさうらうんと取らじさる飯笥分盒みとこり
 うづつけさせ三之助を牛よのりおろさむとまらるさういふ對乃山の
 方より一棟の慕風颯と吹さうり樹林簌くとありひびき満山の
 櫻一度またつと飛らうらうらより年旧大鷗翼を振て勢猛く翔
 来り嗚呼哉とつ間よ牛よのり三之助といひ抵とて古松と掠て
 飛上りなれば左衛門これと見て仰天なり刀おつと駈けり木の根
 岩尖飛こえく雲井の鵬の行く足と空よど追やさる柏木ハ声
 ろいせある悲しやのふと泣叫夢現ともりまんと倒つ轉つ後又続て
 追行いぐ夫はあられて立ちまう空よどとて身と惆悵足を翹て
 手よのべいわれふくと叫べとも翼をくぬ人の身の其甲斐さうよ
 かりりる憐べー三之助の宵のあうり搔やぶられさうとおがし
 懐紙鮮血よ染て颯と吹散手足と掉はして頰さうらう
 臍は見え泣叫ふ声の初雁のやうよびえて衰といふもあうらう
 柏木のこれと見ていふ悲しきやうさうさう悲歎よせりて氣とほる

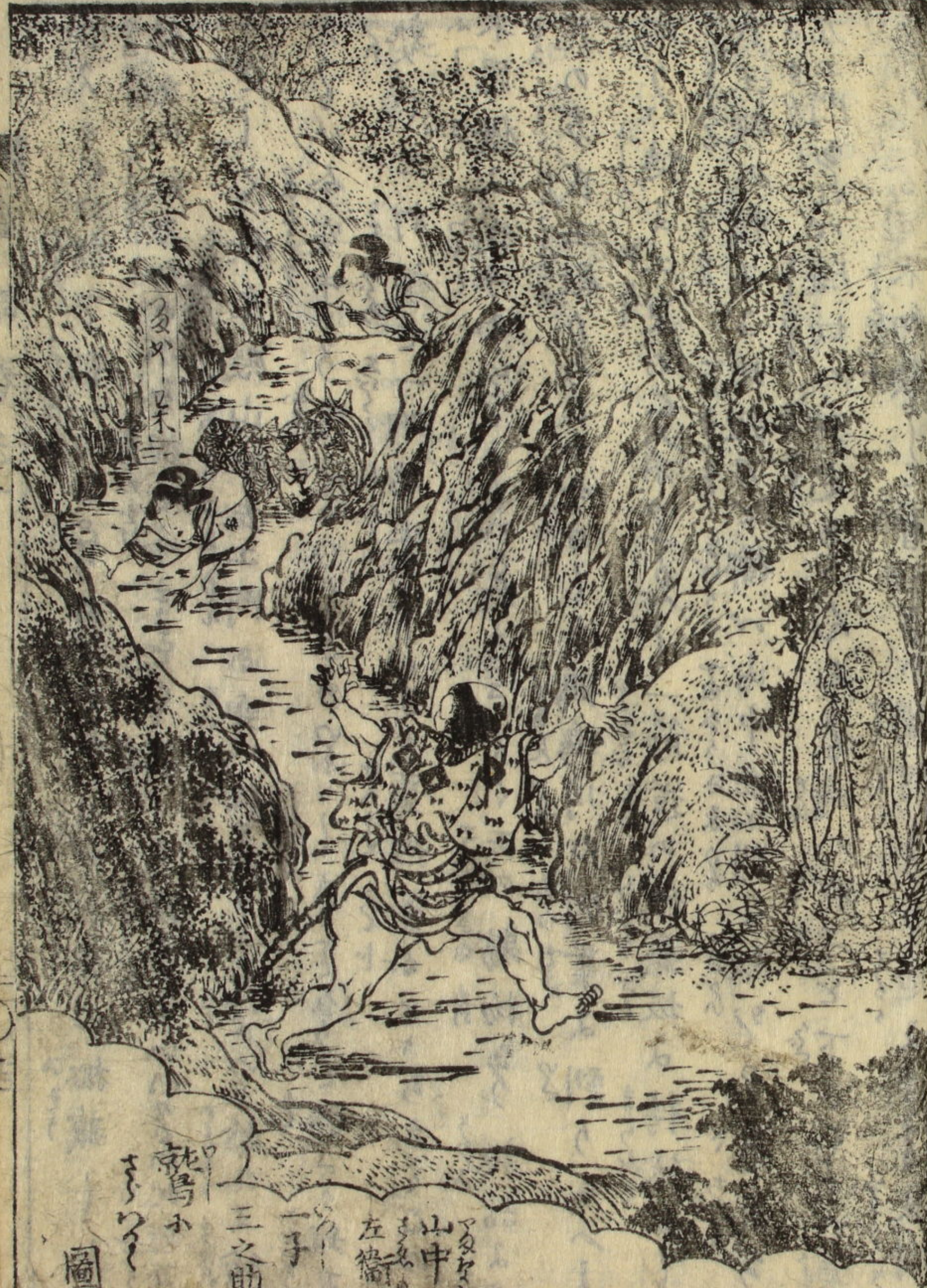
ふとついに三之助頭をうちあがりいやく父上の汚馬はめりあひやうよ
 刀へさして騎べーといひてうけひらさればこれをも彼が心のまよひてのせ
 られは手とうちてよろこび鞞然けりひやふく阿姐見あへ童へ牛よのり
 まづぬといひて牧童は牽と婢女はとくへられてさかへ騎あつて
 最嬉一ささぬありなれば母の柏木夫はひひの牛よのりてさうらうたや寶
 とのく唾あり顔つきの愛らしき幼なれどもあの腰の居やう常吐小児
 とく違ふて見へいといふよ左衛門さにかそとて夫婦私語て我見と羨
 稱するも人の親なる常あり左衛門妻はひひの日ざりゆいふと傾さぬ
 暮ちくぬぬ間よふさうらうんと取らじさる飯笥分盒みとこり
 うづつけさせ三之助を牛よのりおろさむとまらるさういふ對乃山の
 方より一棟の慕風颯と吹さうり樹林簌くとありひびき満山の
 櫻一度またつと飛らうらうらより年旧大鷗翼を振て勢猛く翔
 来り嗚呼哉とつ間よ牛よのり三之助といひ抵とて古松と掠て
 飛上りなれば左衛門これと見て仰天なり刀おつと駈けり木の根
 岩尖飛こえく雲井の鵬の行く足と空よど追やさる柏木ハ声
 ろいせある悲しやのふと泣叫夢現ともりまんと倒つ轉つ後又続て
 追行いぐ夫はあられて立ちまう空よどとて身と惆悵足を翹て
 手よのべいわれふくと叫べとも翼をくぬ人の身の其甲斐さうよ
 かりりる憐べー三之助の宵のあうり搔やぶられさうとおがし
 懐紙鮮血よ染て颯と吹散手足と掉はして頰さうらう
 臍は見え泣叫ふ声の初雁のやうよびえて衰といふもあうらう
 柏木のこれと見ていふ悲しきやうさうさう悲歎よせりて氣とほる

ことと僵こゝろとて消きりぬ小君こきみもてよ走はつと拍木はくぎは懐なつつさ母人はは
 心こゝろとさしうにかしぬや悲かなしやのへと色いろと調とてなきなしし聞きれぬぬ嬬は女に僕は
 追おくよ走は集あつと溪川たにがはの水みづと掬くして顔かほは嘘うそりけ声こゑくくに呼よび活いつここ
 漸しくよ人ひと心こゝろちつたたらぬぬこしりりぬぬ抱かかえて幕まくの内うちは飯いりり山やま中なか
 左衛門さゑもんへ手てとむかしく立たちち飯いり此こゝ躰ていと見て露つゆ現まともああく痴あ呆呆
 迷まひひるるが斯くてああららるるああららねねば小君こきみと副そへて拍木はくぎとかかににののせ
 二人ふたりの志こゝろりりへああととのここして花見はなみの調度てうどととりああららせせ袴はかまの裾すそ高たか
 褰ひて鞆たもとよ副そままともも鶇とらのききたたららくと樹林じゆりんの梢こぎは眼まなこと配はりりつ心こゝろも
 空そらのれかかるる路みちを忙いそぎぎて飯いりり又またりり夫おのの渚おおららるるよ
 ままご星合ほしあ提てい之の助すけハ前まへ日山ひやま中なか左衛門さゑもんががあありり我わが詠うた哥うたと評ひらせせられれて
 主人しゆじん秋季あきの怒おこれれととおおここりり多おほくの人前まへよよて打うち擲ちせせられれるるああららぬぬ耻ち辱じやくと

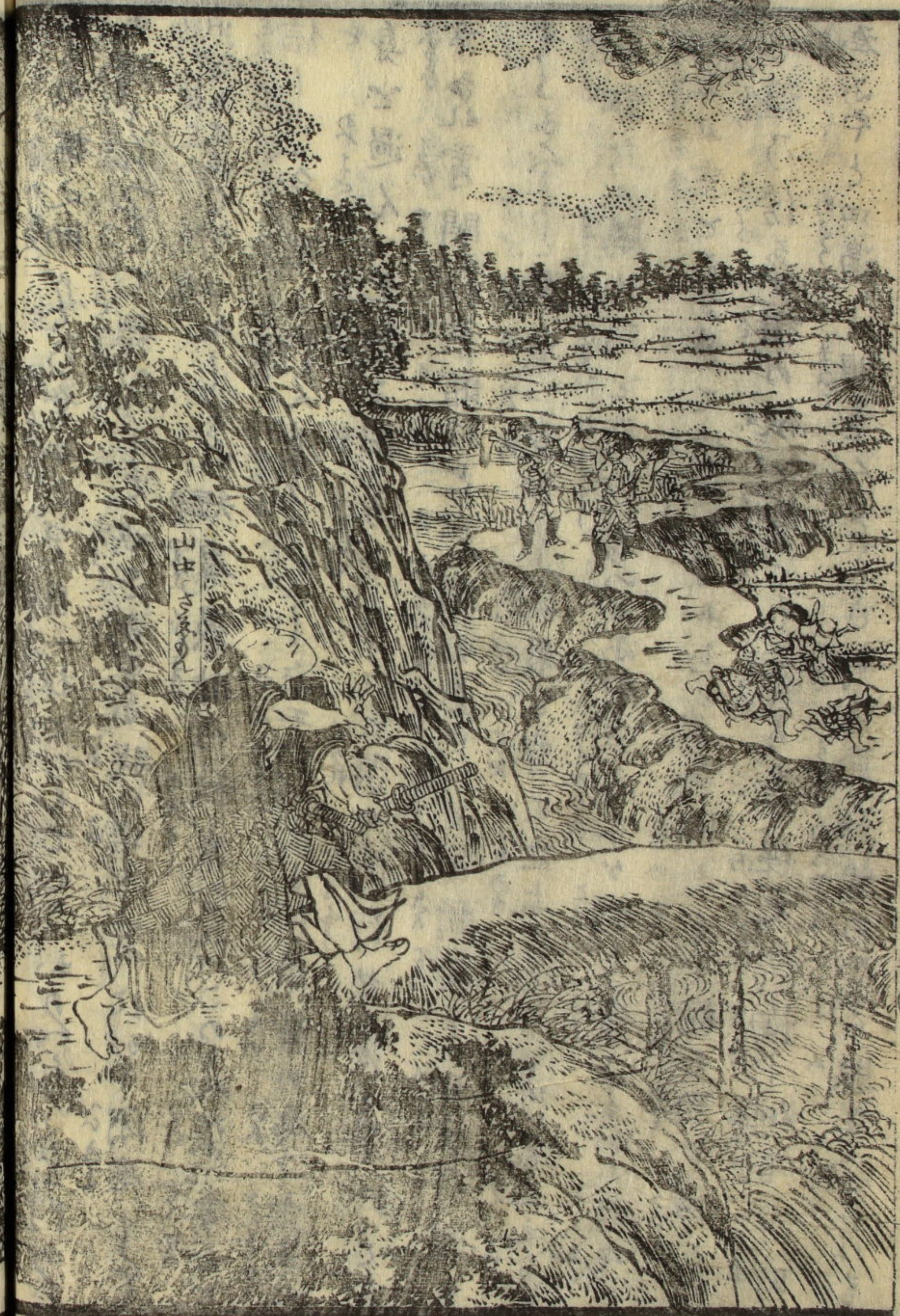
ららひひるるののととああららぬぬ勤こゝろ仕しををああめめられれるるに山やま中なか左衛門さゑもんへへここれれにに喜よろこぶぶ
 かの哥うたと難がたトトるる賞あやむととて秋季あき秘藏ひかくハハ鳩とら丸まる乃な短刀たんとうを渠みちよ給たまははりり
 と岡おか已いがわわしたたを久ひさししとと左衛門さゑもんののふふく恨うらみみも已い又また一ひと月つきああららるるも
 居いるるに秋季あきより免ゆる許りつつたたもああららるるべべここれれも左衛門さゑもんのの諛うそををに
 小このの者ものが播州はくしゆ夷やが濱はまととりり所ところは任まかせせるる漁人いしやうじん蓬よもぎ六むととりり者ものの子こあありり
 小少年こせうねんより武藝ぶげいと好このむむて性質しやうせう乖巧かいこうななれればばかかののれれがが才藝さいげいををたたののんんど
 人と輕詆けいぢ酒色しゆしきと好このんで業わざとつつとああららるる父ちちハ蘆葦あしひのの間まは生なるる匹夫びつぷ
 ああれれハ漢かんを業わざととして一生いしやうととりりんんハ可あららぬぬべべらられれとも已いハ才藝さいげいああららるる

身とらて扁舟は掉て生涯をおろし白頭波上は白頭の翁とたつらん
 計策あはれ似たりとて二十歳は西親を捨て国を立ち諸國を遍歴
 するが五年以前故わつて秋季乃家は仕官今歳三十にまされともいふ
 妻もあけ鶴といふ妾とりつゝ家内僅は六七人のくじあり楮梶之助
 一日庭は登と置て胡坐し酒を飲て居たりしに牆と隔て人の談語
 するはきく一人の山中左門が僕の声あはれ渠何寺の事と談する
 中んと牆乃隙よりうらひひるに山中が僕手小酒壘と提細貨の
 荷とせとひする男に對ひるに主人夫婦見曹を伴ひて花園の
 花見は行とされば飯のあつど夜にりて用事あつて明日来べし
 ついに商人これとて御詔りの夏小つきはえわけは夏ありしゆを
 ほどく来つるに他適とのかかぬて衆るをくしとて右左りへまき

さうぬ梶之助は乃登ふく自一杯とて心はかりへらく左工門の
 夫婦うらつとて櫻ざりして娯をかき我の渠がさかにつ閉居して
 日とおろこせ口おしられ短慮愚昧乃秋季はれこのう渠が毒舌と
 信といふある罪は行んもさうりびに庄工門があとに鼠輩の為は金玉の
 身と過んは無智と似たり今をくしと渠が他行せり然るはるこそ
 幸あれ宵闇乃黑暗紛と左工門奴を只一刀は斬殺し日来乃恨と
 ちうととべしと悪意一変かし庭履と穿て立上りたるとしも三之介と
 挈瓢たる鵬此所と飛行あつるあや三之介が腰は帯するかの旭丸の
 短刀刀室とをさして空中よりおちるなり梶之介が頼を殆く掠りて
 水盤乃傍る樹の根と貫てを立しりたる梶之介恠し何者の一町
 為めやと四邊は眼をくをれとも斬は飛翔葉のかゝる眼は遮りのも



山中
 左衛門
 一子
 三之助
 就鳥ホ
 まり
 圖



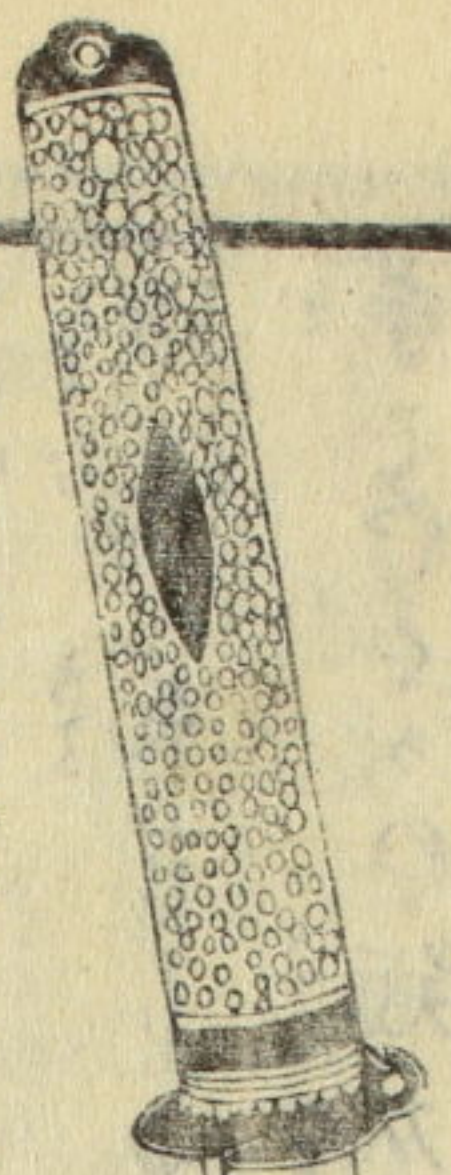
田中
 田中
 田中

田中

ありきれば訝て彼一刀とぞりあげ見れば日来秋幸の秘藏たる
 槍丸の短刀あり小を握之介まきとく異しと独言ありける此短刀の
 まさしく秋幸殿山中左工門小奥へたまひしとすつる槍丸と給は
 るるに今空中より落つるのいふおのふりしきことありと持する短刀と
 熟くと打視て一晌思案しけるが驀然莞余とち名この劍
 不思議と我手おのりしるこれまさしく天の賜物あり説話よすの
 花の方氏王殿りるとも今日も鶴鳴川の別業と到りあふし
 飯りの慥は二更のころありしる一筋道の地藏坂と待伏たりて
 氏王殿の轎子と此短刀と擲る山中左工門と疑はくは愚直あり
 左工門おれば腹切の必定ありんたる時我手と下さるりて真が
 家のつらと不知顔して看さるる間討りも途はまきる良計し

これおまをくと搦諺く背後の方より程あり其の鶴彼登よこ
 かけて居るなるが彼方小此家と仕ふる矣奴織正とりの者突乃
 掃除と来しゆや芭と隔て立聞顔三人と見合れば握之助
 手むやくの短刀と袖ふて覆ひ秘し左ありぬ介ふて鶴と打對
 日もちや暮あんととればかこの小院と至り煙をてらして酒をひ
 べしとこれある酒者もかこへ持来とよといひ前と立て庭隅の
 小亭小ゆる鶴と酌とらせを酒らむむむみみみ玉の杯底知を
 いのちの巧や釀とらん此鶴とりの原逢坂の関の介とすふとある
 武士の浪人の妻の妹ししが貧乏とる姉婿のりし養を
 りのうかりの貧苦の助よもあれうと竊と好とをりて假親を
 くの素姓をかくしを握之助が方へ妾奉公よ来るるを生質

機才姿も多べてあつど年白二八の
 春霞いろりとつむ袖垣まきぶ齒も
 深ぬ白梅のゑりるがごとく面影いと
 あくめしぬふせの多り 借提之助鶴よ對
 今我彼所よりあつて密事と誦しと
 汝さだりてまつり。聞つるのふくと
 問うけられ何とこころをそとせしめと

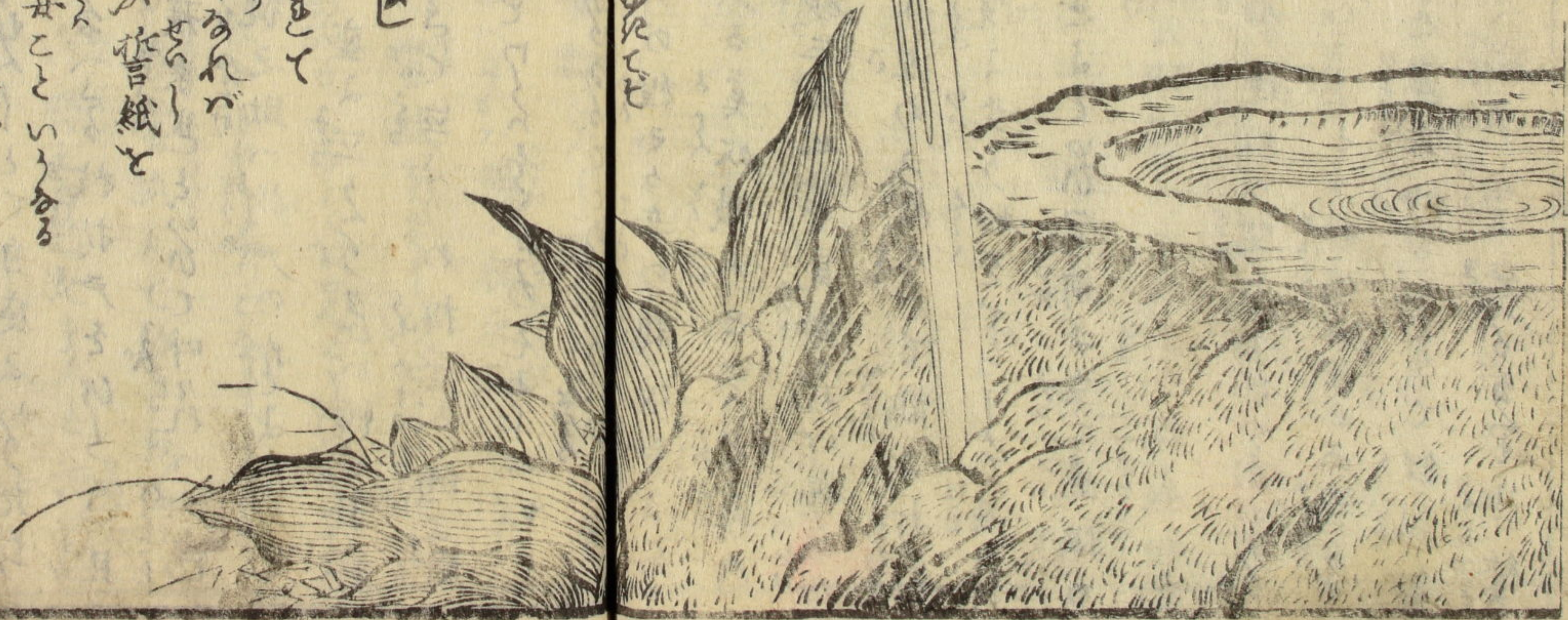


鳩丸短刀之圖

たのど人胸をそれをもりのぬ色ある
 山吹の露よたへみこころおてこころゆたてと

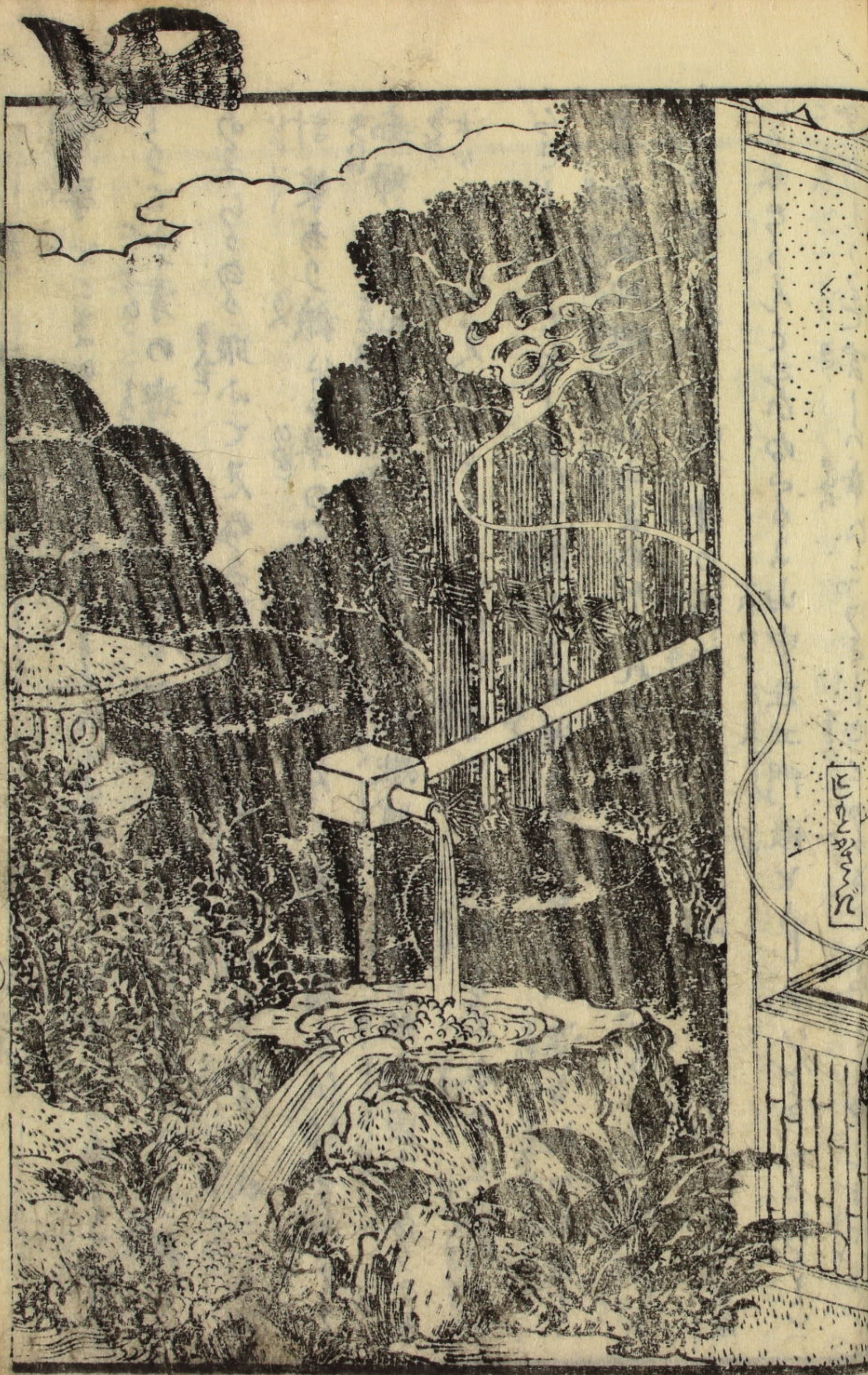
のころたる 提之助のつらもやく渠が
 心中と臆度汝の我枕の塵をも松よ
 かのあればたど人密事と聞つとも妨は
 さりあがつひとこころぬ密計とまきりて

そのまてにまておんハ我が一ツの心障あれば
 汝我よ對して二心と懐まどきこころの誓紙と
 かくべしとりのよは鶴やゆ顔をあび垂こといふる
 ふうた 因縁ありてや去年の冬より君の側づくつと
 まわしてて鴛鴦の襷の初氷解くる帯の二重三重とせ
 ひとびの神りけと長さふん惠よあづりなるとあふとろろ
 たとへつある密事とばはとも人よ漏しぬんよ露をうのあひん

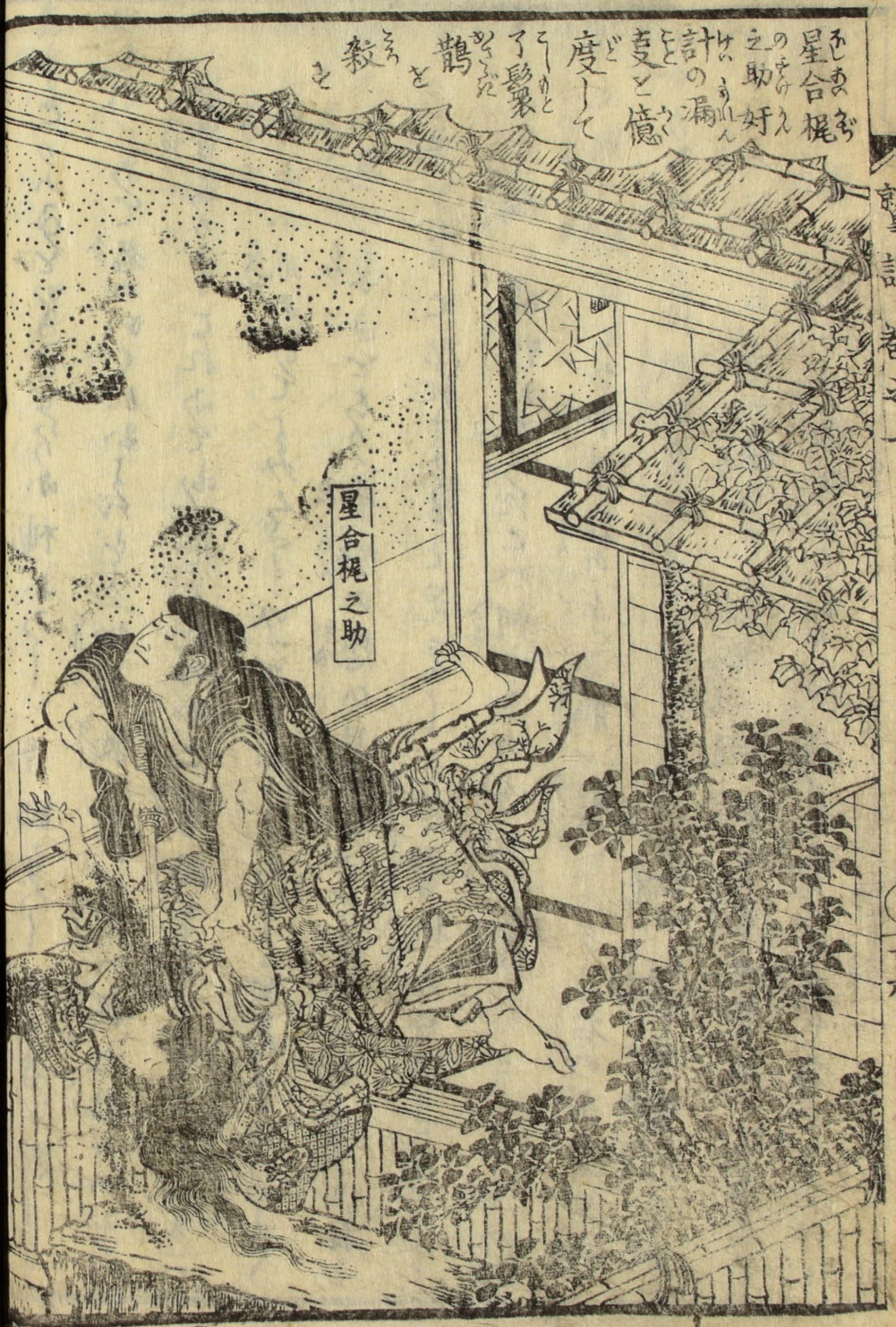


くらぶさうりあうり 他う漏らさるる由事とこそいひつゝいふべし
 心の鏡曇りあはれあうり 又の誓紙とまゝりゆゑんを妻のそむ野は
 侍りいざ部屋よゆたてあゝあんといひて立んとさるとの死をちのめく
 らよわうて書べし 料紙の取来らういびくとして自庭よりたち
 飛石づゝいゝ庭下 駄あしして隔よりぬへる 枝折戸をひらき且
 あらゝとさうたふとて牛平の居どや疾来せといひて叫れば一色
 蒼して牛平とつゝ人憐れをさうめ 梶之助の折戸のれをよたりて
 牛平とらうくま孫さふを叫さるゝの座より立くらうれば頼て牛平
 料紙硯箱とり来り 椽のうゝあさて立くらうぬ 梶之助の鶴は對
 誓紙の文言の他の支と書よかりらうぞうんぞくせのえあふかく
 君といのせらのゆゑとあをうんたさ人のあふことありともいふ

まどさうりいひをいひてさうりあ 神あうりて音記をいひ 汝が名をいひて
 のとふてあて名のかくにかいふと細よ教へられ 鶴の梶之助がのぞむ
 まに昏あうりてこれあてあん心をいふやと誓紙をさうりいひて
 梶之介手小取あていみくらうりふもあうりて見らう人のいひく
 汝が心底の厚きとあり 愛戀の想ひ日來おませりまうてあうり孫と
 いひて手とさうりてひたよさると見えりて 忽髻扱んでひきさたふ
 らるあど 鶴の連忙おどらたとい何ゆゑの沙怒どゆじたまふと泣叫ふ
 梶之助の膝たてあわし 左の手小鶴が髻とみまうり 右の手小の被袴
 丸とゆらさるるぞ眼と見ひききてをことあうり 汝の山中左衛門の身
 簀作といふの妻の妹あうり 頃日牛平が告るによゝてあうり
 汝が今宵の為体日來よことくらう心あつさやうあひてあうりあうり



星合棍之助



星合棍之助

星合棍之助の好計の漏れを意度として了髪を鶴と殺す

新編 忠臣蔵 巻之二

密事とこまやうふきえんとするにまごひかきし汝妹ふつるが縁よ
 ようて今宵の密事と山中ががたへあつさんとのあつ心と我この
 わさたらあめ眼ふてえぬきたり汝は誓紙をわけてよるの我が一つの
 計策あり餓る羊のごと死身とわけて虎の鬚をひきしんとする
 痴婦の此一刀の引導ふて地獄城へあつとも極樂国土へあつとも
 汝がかりのうへにけりしとつひの雪のごと死胸の氷を被短刀と
 ごととさうとわかれの鮮血と逆りてのそと深る紅の此世し
 血盆地獄劔の山よのがされて身と裂るがごとくあり鶴白の
 息とつぎこれまでおん身の悪行を見えしにつけらるるくちのゆえ
 いとぬらうんとあひあつる山中左工門殿とらじまのりたるたつと
 見せつるおまをやくも是と曉らして邪見のみよつらぬりて命
 ごとく口惜さうとこころせたと人此身のまごひは斬るを
 魂魄へ此世よとまきし此恨とむいてやあふきと柳眉とけしを牙と
 かゝ虚空とつむむ苦痛の体顔も乱る黒髪は月と遮る青柳の
 目もあてられぬ形勢あり梶之介いおさけりひあなうけし喚言うな
 つとく此世のいとぬらうとまごひとさもあつさげ小言うてありそでの
 袂と口よ響のんどぶくと一錠まがりれば手足とわぐだんまらま
 此世のよのりつと霜紅顔ひましく変ドワ浅黄櫻と散らせりて
 无常の風のみさきりぐる軒よりける簷馬の音も輪廻の責念は起
 向の鉦とそこゆれど三途の暗さ蠟燭の涙をおとせ人もあつこの
 魏国の曹操が刺客とふせ計策よ命おとせ一羅幸よも途よも衰へ

密事とこまやうふきえんとするにまごひかきし汝妹ふつるが縁よ
 ようて今宵の密事と山中ががたへあつさんとのあつ心と我この
 わさたらあめ眼ふてえぬきたり汝は誓紙をわけてよるの我が一つの
 計策あり餓る羊のごと死身とわけて虎の鬚をひきしんとする
 痴婦の此一刀の引導ふて地獄城へあつとも極樂国土へあつとも
 汝がかりのうへにけりしとつひの雪のごと死胸の氷を被短刀と
 ごととさうとわかれの鮮血と逆りてのそと深る紅の此世し
 血盆地獄劔の山よのがされて身と裂るがごとくあり鶴白の
 息とつぎこれまでおん身の悪行を見えしにつけらるるくちのゆえ
 いとぬらうんとあひあつる山中左工門殿とらじまのりたるたつと
 見せつるおまをやくも是と曉らして邪見のみよつらぬりて命
 ごとく口惜さうとこころせたと人此身のまごひは斬るを
 魂魄へ此世よとまきし此恨とむいてやあふきと柳眉とけしを牙と
 かゝ虚空とつむむ苦痛の体顔も乱る黒髪は月と遮る青柳の
 目もあてられぬ形勢あり梶之介いおさけりひあなうけし喚言うな
 つとく此世のいとぬらうとまごひとさもあつさげ小言うてありそでの
 袂と口よ響のんどぶくと一錠まがりれば手足とわぐだんまらま
 此世のよのりつと霜紅顔ひましく変ドワ浅黄櫻と散らせりて
 无常の風のみさきりぐる軒よりける簷馬の音も輪廻の責念は起
 向の鉦とそこゆれど三途の暗さ蠟燭の涙をおとせ人もあつこの
 魏国の曹操が刺客とふせ計策よ命おとせ一羅幸よも途よも衰へ

梶之介、鮮血あつてゐる劔をさけて、椽先より立りて軒より下りて、蒼馬と
 とうせせましくありあはれ、此響よめる相番のやあり、えん彼志、
 牛平さたやと、龍とも小密事を立言しつる、あつて織平を高年
 こて小のぬし、めさる、らつとを、あせてひたさたりぬ、織平は梶之介が
 血刀とさげ、さつたえてまき、かどりた逃んと、わぐくと牛平が、あつて
 ひくても、さつらせ、せむせむ、せむせむ、の、さつ、に、さつ、ひ、お、さ、さ、
 せ、せ、あ、人、と、撞、放、て、梶之介、椽の上より、織平が首、あつ、打、お、し、
 出来せし、牛平さたやと、お、あ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、
 織平の、兩人を、わ、く、手、よ、う、け、し、て、だ、て、だ、り、て、鶴、よ、め、せ、つ、
 誓紙は、織平と、わ、く、あ、て、あ、と、昏、加、へ、渠、ら、二、人、と、不、義、り、の、と、し、
 死、骸、い、る、ゆ、り、が、親、族、へ、つ、と、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、
 代、は、是、より、地、蔵、坂、へ、立、こ、え、

氏王どの、取りと、もち、もち、もち、もち、もち、もち、もち、もち、もち、もち、
 せ、ま、と、り、の、間、程、多、く、更、の、鐘、は、梶之介、の、氣、の、懸、ま、か、の、好、丸、の、服、紗、
 みつ、て、か、く、持、黒、き、頭、巾、は、黒、小、袖、我、家、あ、つ、ま、の、身、の、や、ま、い、
 わ、や、あ、た、庭、づ、み、ひ、竹、の、生、垣、お、し、け、て、栖、の、鳥、と、驚、し、逸、足、ゆ、て、走、行、ぬ、

第三齣 飛劔

此日、花方、の、氏、王、丸、と、伴、ひ、て、花、園、よ、り、り、彼、呀、叱、呀、を、排、徊、て、櫻、を、
 賞、ト、た、ま、ひ、ら、る、れ、年、老、の、家、臣、と、い、つ、で、此、所、は、御、幕、と、を、ら、さ、せ、
 た、ま、ひ、花、見、る、人、の、駢、岡、し、た、さ、ぬ、と、伊、覽、あ、る、べ、う、と、さ、あ、り、り、は、花、此、方、
 お、せ、ら、る、ん、今、日、鶴、鳴、川、の、山、莊、よ、り、り、氏、王、丸、と、も、慰、ま、さ、し、
 相、公、よ、ま、え、わ、げ、つ、と、べ、ら、さ、し、時、と、う、と、を、珠、更、あ、る、の、人、
 一、ろ、て、最、か、し、ま、し、早、く、去、り、ま、ん、と、宣、ひ、て、花、園、を、た、ち、こ、り、

ふとび轎よりて鶴鳴川の別業よりつりたまひなるより結てその
 まうけありつれが昏院ま彩席をあらつる松花の方氏主丸を錦の
 網に座したまひさくふ並居る侍女侍のあひくは着るうらまは

雷木のうりわのめだてであらふも花の咲つらうといともあや死

らる粧ひありかくてさぬぐのおんあまびよ時うつり黄昏の

ころふりつりて飯館と促したまひ花の方氏王丸轎子よ

りたまひて飯路におもひさたまひつらるが路の程

半過ころ日ひまらたく暮よりさても星合

梶之助の我家とあつひ出地藏坂といふ野の

並木の松は時今やくとまらなむと遙向の

方よ灯のひり見えればとら氏王丸の

来つるへと肝幹をけらるる枝乃

あびそと身とくくしとゆらるる

りの灯のちつづくて見ればとれ

ふのわらで農人ども明松を

てら一高話いつ過去ぬれ

本意かくる野は一晌のり

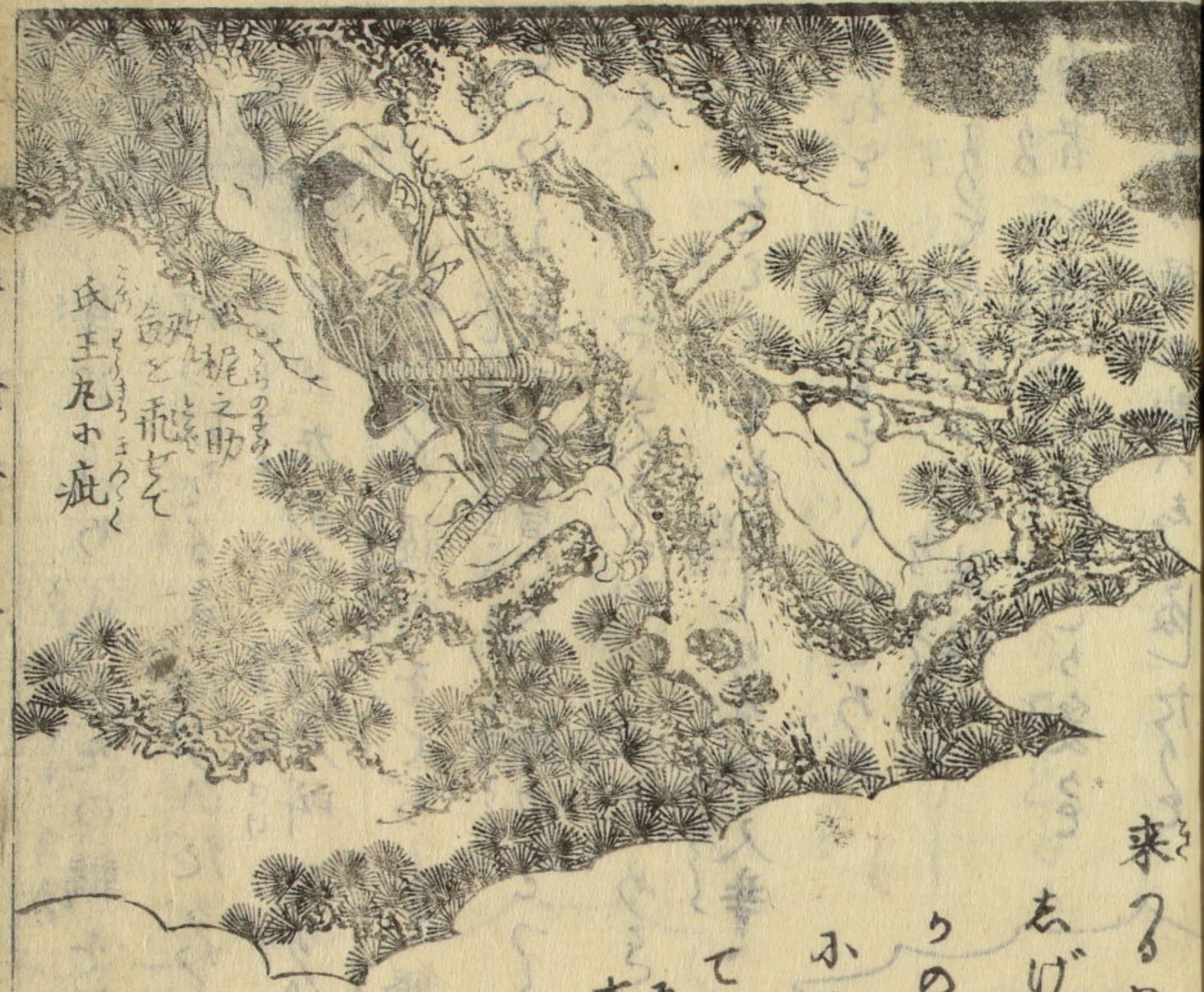
堤の上は提灯の光りやれ

行列たぐりくささるるを

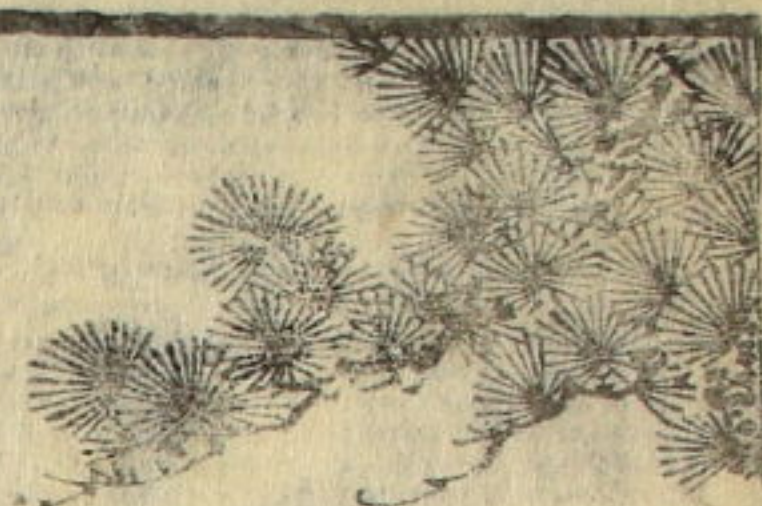
見ればこれの花の方氏王

君の黨勢ありや述ぶ

れば梶之助の松の枝よ



梶之助
 合と飛せ
 氏王丸疵



身とくさめ氏王丸の轎を目がけて彼惣丸を手裏
 打つけたるは神くひたぐらむ轎子の函を打中ぐら
 氏王丸あらと一声叫びひらるふぞ供の侍連忙
 おむろぬ提灯をてらして轎子の戸を開きとび

こいつら氏王丸肩尖は短刀をつらぬく

あまらうやうえんがさやと泣きめさ
 朱よそとてどおへいなる供入寺

これと見てまをくおむろぬ

打よりて介抱か一若侍の

曲者と捕へんととこり爰を

走まる棍之助へおを返したりと

打るとて松のこもあは身とひとあ

猶もやうとぬらむひらるささとも

氏王丸の手さぐ急所とよけ

浅手あれば供よめつれられさ

医人いとがらく薬を用ひて

疵をつと花のこの轎へ

うら一のせまるせ片時ゆ

そやくゆ飯館あるべうとて

供人寺一塊とありて轎乃

前後と守護つとやうとさ

いとだ飯すぬ棍之介は此人との



氏王丸櫻符の
 飯の暗み
 疵ら



いりり行去ると見て松とさうりて来しとち人さうさうんと
あるとた。木立のふげしう何者ある中ん突出で名をうけど
鎧と把へてさうくとひたぬ。棍之助のひうれあう其力量を
試とあやめりぬ。闇夜もバ打扮のまると見くされども。さうの
あうむとちん小ぞ。言辞とさうさうり色をまあうさうものあうさ
口を閉てりのりど。心のうち小點頭。さう一討と刀の柄と手を
うけしに。渠もまうと手むく鎧をとつてこらわけられ。さうさう乃
棍之助も持有りて前乃さう躓倒んとせしと危く踏らる
カとさうりて振放ら。間もあうせど斬つる刀の列缺閃をかの
者ハ飛鳥乃ごとく身とよけて木立を楯と同居り。棍之助の
空と斬て気とつらちわりせしう残念やと。かりん心の乱れし

石の地藏よりあうりさうと踏こむ拜打佛の袈裟がけ葛地よ
火をかむつと飛散らう此ひま小かののの棍之助と瞥然と見て
探ようする手の尖さうと捕へし小袖の袂互のさうと引断る袖を
后日の證拠ともあうぬ。无紋の黒漆も洗へりる善悪邪正棍之助ハ
此ひま又跡を晦せ逃去らう。○此時棍之助と控えらる者何人、りんこ
うらど詳あうらう。四之巻とさうさうてあうらう

読鳥誌傳奇桃花流水卷之一終

